



「手」から「毛」が連想できるなんて

一年生の声を聞きながら漢字学習

加藤学園暁秀初等学校

神戸 由美

yoshimi@kato-net.ac.jp

「先生、毛って漢字に似てる。こっちに曲がると毛になるよ。」「手」という漢字をみんな練習しているときに一年生の子どもが言った言葉です。

手を見て、「毛」というわけで、「手」を練習したとき、いついっしょに「毛」も練習しました。

すると、「それ、野毛ゆづきちゃん(クラスの子どもの名前)の毛だ。」「ああ、そうだね。野毛のげだね。」「先生、それ毛布のモウとも読むよね。」「そうだね、モウとも読むね。」「まるで連想ゲームのようでした。ああ、これが子どもだと思いました。」

少して、隣にいた二年生の子どもが、「毛っていう漢字は、一年生で習う漢字じゃないよね。一年生で習うなんて、先生、めっちゃくちゃじゃん。」「とに言いにきました。私は、子どもたちが、「何年生で習う漢字」にいかに縛

られているかを感じました。というより、教師が「何年生で習う漢字」に縛られ、子どもをそうさせていることを改めて反省しました。

めっちゃくちゃでいいじゃない。「何年生で習う漢字」も大切だけど、今必要な漢字、今使える漢字、今習いたい漢字に、もっと目を向けたらいいのでは…。

漢字を練習しているときに、子どもが言っていることを耳を傾けていると、子どもが知っている言葉や漢字がどんどん出てきます。それがおもしろくて、四月以来、子どもが言っていることをよく聞きながら、漢字を練習してきました(二〇〇三年四月より)。加藤学園暁秀初等学校一年生三十名で実践)。その一部を紹介いたします。

四月当初、「ひ・と・や・ま」など、平仮名を練習しているとき、「人」という漢字、知ってる。」「山」という漢字、書ける。」「という子どもたちの声。」「そうだね、漢字もいついっしょに書いちゃおう。」「と、平仮名といついっしょに漢字も練習しました。

山を練習しているとき、「それ、ぼくの漢字。だって山口の山。」「ぼくだって。山本の山。」「。

見を練習しているとき、「ぼく、それ練習しなくても書ける。だって、松見の見だもん。」「松見君の松もついでに覚えちゃおう。」「。

川を練習するとき、「えりかちゃんの名。だって早川だもん。」「ゆうと君だってそうだよ。小川だから。」「今までに、山本・山口・八木・松見・早川・赤つか・小川」を書きました。

一年生の五月ごろ、算数「なんばんめ」の学習があります。「先生、上って漢字、書けるよ。」「そうだね。せつかくだから、上下左右、全部練習しちゃうおう。」「そして、算数の時間にも何回も書きました。

大を練習しているとき、「先生、大に点を付けると犬になるよ。」「点をつけると恵太(クラスの子どもの名前)の太にもなる。」「という声。そこで、「大、犬、太」をいついっしょに練習しました。

丸を練習しているとき、「丸から丸ができる。丸って知ってるよ。だって、ぼくのお父さんの会社の岸丸建設の丸だもん。」「じゃあね、みんな丸を書いてみよう。」「似ている漢字はまとめて練習すると覚えやすくておもしろいよ。」「。

木を練習しているとき、「木が二個で林になる。」「そうだね、三つだと森だよ。」「いをつけるのと休むだよ。」「休に似ている漢字は体だ。」「のまのつに、ある漢字が他の漢字の部分にならう。」「のまのつに、子どもたちは、よくその漢字を見つけてます。」「口と右、木・林・森、木・本・休む・体、子・字、なごはひつまひまりで教えました。」「。

学校という漢字を練習しているときの子どものひと言。「学には片仮名のツが付いている。」「子どもも入ってる。」「上を変えると字になる。」「あつ、校の中には六がある。」「校のきへんをとると交になるよ。交わる」と読むよ。」「校には父も入ってる。」「という声。そこで「学校」という漢字を練習したとき、「いついっしょに「子、字、六、交、父」も練習しました。」

学年を練習しているとき、「一年生、二年生と順番に書いてみよう。」「と言いました。すると「中学三年生の次は高校ですよ。高校ってどう書くの。」「それは、高橋(クラスの子どもの名前)の高だよ。」「と言いつつ、黒板に「高」を書いて見せました。それを見た子ども「これって、全部、前に習った漢字の部品でできてる。」「と言いつつ、全部、「高」を書いていました。

これらはほんの一例ですが、漢字を練習しているときに、子どもたちから発せられる言葉を聞いてみると、その漢字といついっしょにどんな漢字を提示したらよいか、次はどんな漢字を教えたらよいか分かるように思えます。明日は、どんな漢字が学習できるか楽しみます。

教科書では、いついっしょに学習すると理解しやすい漢字について、「ことばの広場」なかまのかた字、「一年生、二年生」で取り上げよう。